【研究ノート】

# 中国の山岳と宗教見聞記（その三）

## 南岳衡山・茅山

薄井俊二

### はじめに

二〇〇五年より、科学研究費補助金を得て、中国の山岳を実地調査する機会を得ている。その折の調査の概要と結果について簡略な報告を続けているが、本稿はその第三弾である（1）。今回は、湖南省の南岳衡山と江蘇省の茅山の二箇所について報告する。

### Ⅰ．南岳衡山初訪

#### 一．南岳衡山について

##### （一）山の位置

南岳衡山のある湖南省は、古名を「湘」と言う（2）。省の北辺を長江が流れ、北東隅に洞庭湖がある（図1・2）。そこへ向けて、湘江という大きな河川が、南から北へ湖南省を貫くようにして流れている。そのため、湖南省は緯度は北緯二十五度～三十度と低いものの（沖縄や奄美大島程度）、四季を通して湿度が高く、霧がちである。夏は極めて暑いが、冬は気温が低く、中国全体からすれば南部に位置するが、決して温暖ではない（3）。

湖南省の省都は長沙（上海から飛行機で一時間半程度）。長沙から南へ約一五〇キロのところに衡陽市がある（図2）。衡陽市の北部地域に衡陽市区の飛び地として南岳区があり、そこに聳える山塊が南岳衡山である。南岳区の中心市街地は南岳鎮といい、南岳の門前町である。長沙からは約一〇〇キロで、徒歩の時代なら二～三日間、今は高速道路を利用すれば、三時間程度の行程である。

かつては南岳七十二峰と称していた時代もあった。その場合の南岳にはかなり広い範囲が含まれ、長沙市内の岳麓山もその一つに数えられていた。しかし現在南岳といえば、右記の衡陽市内の山塊を指す。

### （二）概要

南岳衡山は、五岳（他は東岳泰山、西岳華山、北岳恒山、中岳嵩山）のひとつである。主峰は標高一二九〇メートルの祝融峰。その周囲の、天柱峰・芙蓉峰・紫蓋峰・石廩峰が中心である。

南巡中の舜や禹が立ち寄ったという伝承や、祝融と関わりがあるとされる。漢代に五岳のひとつとして尊崇され始め、国家レベルでの山川の祭祀の対象となった。

南北朝期になると、道教・仏教が入り、本格的な開発が始まる。茅山派道教の開祖とされる魏華存は、昇仙後南嶽を領したとされ、南嶽魏夫人と称される。唐代の道士司馬承禎もこの山に関わったとされ、「天地宮府図」では、三十六小洞天のうち、霍洞山・泰山に次ぐ第三位に位置づけられている。仏教側では、南北朝末期に南岳慧思（五一七～五七七）が出て仏教教学を発展させ、彼の弟子の智顗に至って天台宗が花開いた。その後、寺院道観が数多く造られ、また山麓には国家祭祀の場である南岳大廟も設けられた。とりわけ南宋時代には、他の四岳が中国北部にあってその支配下から外れたこともあり、南岳の重要性は大いに増した。朱子が学問を講じた岳麓書院は、南嶽近隣の長沙にあり、学問の拠点として大いに栄えた。

その後元・明・清代を通じて尊崇され続け、多くの建築物が造られたが、現存する施設のほとんどは、明清時代に再建されたものであり、古い建築物は少ない。

その中で南麓の南岳大廟（図4）は、山麓型の大型施設として注目される。南岳の神である「祝融」を主神として祭るが、現存する五岳の廟のうち最大で、配置が完備しており、北京の故宮に倣ったとも言われる。中央のラインに祭祀の施設が南から北に並び、その延長線上に南岳が聳える配置となっている。中央のラインから向かって左側に仏教施設が、右側に道教施設が配置されており、更にその右には孔子を祭る文廟がある。国家的祭祀の施設を中心に、儒仏道三教の施設が同居する形となっている。

## 二．見聞記

### （一）目的

これまでたまたま五岳は調査対象としてこなかった。泰山という最も大きな存在はあるが、日本ではあまり注目されてこなかった南岳を五岳研究の手始めとすることとして選んだ。

南岳衡山という、仏・道教や山川の祭祀と関わりの深い山岳が、どのような風景・環境を帯びているのか。このことを大観することを第一の目的とした。あわせて、長沙という、古くから開発されてきたまちの立地環境や、有名な帛書が出土した馬王堆漢墓についても実地で体感することも目的とした。

### （二）旅程（単独行）：二〇〇九年一月四日～七日

1．成田→（飛）→上海→（飛）→長沙（長沙市泊）
2．長沙→衡陽市南岳区：衡山山中見学（南岳鎮泊）
3．衡陽市南岳区：衡山山麓道観・衡岳大廟見学→長沙：湖南省博物館・馬王堆漢墓見学（長沙市泊）
4．長沙：岳麓書院見学→（飛）→上海（上海市泊）
5．上海：上海博物館・文廟見学→（飛）→成田

## （三）アクセス

南岳衡山は、僻地にあるわけではなく、比較的通いやすい位置にあるといえよう。湘水沿いの至近のまちが衡山県である（図2）。陸路あるいは水路でここまで至り、西に十キロほど入ると南岳鎮に至る。明の徐霞客は、崇禎十年（一六三七）に、東の茶陵州から衡山県に至り、そこから衡山に登っている（同「徐霞客遊記」）。帰路はやや西に迂回して南下して衡陽県に出ている。大正時代の常盤大定は長沙から鉄道で珠洲まで至り、その後、湘水の水量がすくないため、船ではなく轎子（かご）で衡山県に行っている。その後衡山を遊覧した後、徐霞客と同じく、南へ向かって衡陽県に至り、湘水を下って長沙に戻っている（同『支那仏教史蹟踏査記』）。

今回は、長沙から高速道路で南に下り、衡山県から衡岳鎮に入るルートを取った。帰路も同じ。

## （四）見聞報告

**初日**は移動日。長沙市内の湘江西岸岳麓山麓の麓山賓館に泊。

**二日目**は専用車で南岳へ。しばらく南下し、昭山から高速道路に乗り、朱亭湘江大橋を経て新塘で高速を下りる。その間、ほとんどが農村地帯で、高低差の少ない棚田も見られた。途中、交通事故に遭遇し、三十分ほど停止。新塘から東に進み、再び湘江を渡って衡山県に入り、南岳区に至る。途中のロスを除けば、二時間半の行程であった。

一旦ホテルにチェックインし、昼食後、現地ガイドを拾って南岳山中へ（図3）。現在南岳は自家用車は入れず、麓でシャトルバスに乗り換える。十五分ほどで中腹の半山亭に着く。ここは玄都観という道観でもあるが、観光施設化している。標高六〇〇メートル。ここからロープウェイに乗る。残念ながら霧が深く、何も見えない。十分ほどで南天門下に到着。ここから最高峰の祝融峰まで一時間ほどの登り。南天門（写真1）をくぐり、獅子岩を経て、先ず高台古寺（写真2）に至る。ここは南宋の朱子も訪れた古刹であるが、今は寺院としては機能しておらず、煉瓦の建物があるばかりである。次いで上封寺（写真3）。かつては光天観という道観であったのが、隋の大業年間（六〇五～六一七）に煬帝が寺院に改めさせたという伝承がある。ここから右に登れば望日台という遊覧施設に至るが、今は左に道を取り、祝融峰へ。

祝融峰には祝融殿という、明代創建と伝える施設があり、古代の神である祝融を祭る（写真4・5）。衡山が南を象徴することから、火の神でもある祝融と結びつけられたものだろう。現在の施設は清代のもの。ここは南岳衡山の最高峰であり、四方を俯瞰すれば絶景であると言われるが、残念ながら霧のため何も見えない。ただ、雲海の美しさだけは堪能できた（写真6）。三十分ほど山頂にいて、そのまま同じルートで下山した。

山中には他に様々な施設や遺跡があるが、今回は訪ねられなかった。時間がなかったこともあるが、山内が整備され、シャトルバスやロープウェイなど交通の便が整えられた反面、主たるルートから外れた場所を訪れるのが難しくなっている。ガイドブックを見ると、シャトルバスも山内を経巡るようになっているが、実際には山麓と半山亭を往復するのみで、それ以外の

ところへは行かなくなっていた。徒歩で時間をかけて回るか（一日では回りきれず、山内に宿泊することが必要）、車両の乗り入れのためにあらかじめ許可を取るしか、山内を経巡る手立てはなさそうである。かつて回った天台山や五台山は、その当時は入山料さえ支払えば自家用車を乗り入れて回ることができたが、やがてそれらも南岳同様の扱いとなるのであろうか。この日は、南岳区の神龍壽岳国際酒店に泊。

**三日目**は先ず山麓の施設を見学。南岳大廟については既述した。早朝のこととて、参拝客はまばらで商店もまだ開けていないところがほとんど。小雨の中、静謐な雰囲気を感じながらの参観となる（写真7）。日中、とりわけ繁忙期の人混みは想像できた。

次いで山麓の道観の黄庭観へ（写真8・9）。山の麓からやや登ったところにある女性向けの道観である。少し前のガイドブック（『中国名勝旧跡辞典』ペリカン社）などには記事が載っており、観光の対象としての扱いを受けているが、今回実際に訪ねてみると、女性道士と女性信者だけが集う宗教施設として機能しており、観光地としての色彩は全く感じられなかった。落ち着いた閑かな環境の中で、読経の声や音楽の演奏が聞こえ、真摯な信仰の場であることが強く感じられた。山内の道路環境や観光ルートが整備されるに伴い、南天門や祝融殿などは全くの観光地と化しているのに対し、ルートからはずれた黄庭観などは、逆に観光客が訪れなくなり、本来の宗教施設としての性格をより強めているように思われる。いわば観光地的施設と本来の宗教施設との二極化が進んでいるのではないかと思われる。

午前中に長沙へ戻る。往路とほぼ同じルートをたどり、高速道路を利用して一時間半程度。書店に立ち寄って昼食。その後は宿周辺を単独で散策。冷たい雪交じりの雨が降り出し、寒くなる。始めにも述べたが、長沙あたりは沖縄とほぼ同じ緯度であるにもかかわらず、冬は寒い。この日も摂氏零度近くであった。しかも湘江沿いとて湿度が高く、骨の髄までしみこむような寒さである。夏の高湿度も厳しいが、冬のそれも体に堪えるだろう。初日と同じ宿に泊。

**四日目**は長沙市内を観覧。先ず岳麓書院へ（写真10・11）。当初は予定していなかったが、ガイドの薦めで早朝に散策。市内の西部、湘江西岸の岳麓山東麓にある。宋代の開設で、皇帝の額を賜ってから栄え、南宋時代には朱子も講学するなど、中国を代表する書院（学校）であった。現在は湖南大学の立地の中にある。

山麓に位置し、岳麓山を借景にした景色は素晴らしい。野鳥のさえずりが聞こえ、落ち着いた雰囲気の場所であった。しかしここでも湿気は厳しく、講師の居所を覗いたが、朱子先生もさぞや寒湿に苦しめられたのではないかと想像した。

次いで改築後の湖南省博物館へ。展示物のメインは馬王堆漢墓関係。帛画・帛書や墓の主人のミイラなどは有名だが、あわせて出土した漆器が美しく、その意匠も奇抜であった。なお、中国では近年、北京の故宮博物院を除いて、フラッシュを焚かなければ撮影が可能である。その一方、いわゆる図録の類はほとんどない。

次いで馬王堆漢墓を訪ねる(写真12)。高さ十メートルあまり、周囲が三十メートルほどの墳墓で、病院の敷地内にある。冷戦中に防空壕を掘ろうとしていて発見されたという。現在は3号墓のみ残し、他は埋め戻されている。3号墓は、その上にプレハブの建物が建てられ、発掘した状態を観察することができるようになっている。あいにくこのときは工事中で、建物の中には入れず、窓から覗くだけだった。

夕方に搭乗し上海へ。福州路の呉宮大酒店に泊。

**五日目**は上海観覧。早朝、宿の周囲を散策。福州路は古くからの書店・文具店や骨董品店などが並ぶ文化街。数階建てすべて書店の上海書城や、古くからある上海古籍書店がある。他に小さな路地を入ると古書店や理系書籍専門店なども見つかり、神田の神保町のようなところである。

次いで文廟へ。いわゆる孔子廟で中国の主な都市には必ずあったものだが、上海人のガイドはその存在を知らなかった。古書の青空市が開かれるとのことだったが、残念ながら日曜日の午前のみ開催とのこと。再訪を期す。

最後に上海博物館へ。ここは再訪だが改めて所蔵史料の多さ豊かさを感じる。とりわけ青銅器が豊富で、書籍やミュージアムショップも充実している。昨年から入場料が無料となったこともあり、時期を失すると入場にも不便を来すほど入場者が多い。

午後上海浦東空港から成田へ帰着。

### (五) まとめ

今回は初めて五岳のひとつを訪ねた。泰山と並び、早くから観光地化も進んでおり、奥深い幽山という趣はほとんど感じられなくなっていた。本文でも触れたが、山内の道路網の整備と専用車両利用により、特定の施設のみが賑やかとなり、それ以外の場所は一般の人が訪れなくなっている。拝金主義的な観光地と静謐な祈りの場との二分化が進むのかも知れない。この点では、期待ほど体感するものはなかった。

その一方、南岳大廟における三教共存の様相や岳麓書院のたたずまいなど、現地で実見することで得られるものも少なくなかった。湖南省の多湿性を体験できたことも大きい。山内の他の施設とその立地環境の調査は、再訪時の課題である。

## Ⅱ. 茅山初訪

### 一. 茅山について

#### (一) 山の位置

茅山のある江蘇省は、古名を「蘇」という。省都は南京で、省南部の長江下流域には、蘇州・無錫・揚州など古都が多く、日本との関わりも深い地域である。南京市の東の錦江地級市に句容市があり、その東南隅に茅山が位置する。南京から直線距離で約七〇キロ、至近のまちの句容市からは約二五キロである(図5)。

#### (二) 概要

主な峰が三つあり、最南端の大茅峰が最高峰で海抜三三〇メートル。北に二茅峰・三茅峰と続く。山の周囲は七五キロあまり。決して高い山ではないが、周囲から突出しており、高峻なイメー

ジはある。山域は南から北に延びており、南端の大茅山から望むと、緑の山が奥深くまで続いてるように見える（図6）。

漢代に、茅盈ら三兄弟が昇仙したとの伝承からの命名で、六朝時代に道教の名山の地位を確立した。南朝梁武帝の時代に、道士の陶弘景（華陽隠居と号す）がこの地に隠棲したが、彼を信任していた皇帝は、都の南京からしばしば使者を使わして彼に様々なことを相談したので、陶弘景は「山中宰相」とも称された。

かつては「三宮五観」と称される祀廟が山中に展開していたが、太平天国の乱、日本軍による進駐、文化大革命などにより、そのほとんどが破壊された。近年になり復興が行われ、①大茅山山頂の「九霄万福宮（頂宮）」、②大茅山山中の「元符万寧宮（印宮）」、③小茅山北の「乾元観」の三つが現存する。印宮には、高さ三三メートルのコンクリート製の「老子像」がそびえる。他に洞窟が数多くあり、陶弘景に関わるとされる「華陽洞」や「仙人洞」などが整備されている。

## 二．見聞記

### （一）目的

茅山は、南北朝期には既に名山として開発されていた山で、古都南京にも近い。山全体の霊山としての雰囲気を知ることの他に、南京との地理関係（距離関係）についても何かを感じられないかと思い、対象に選んだ。なお、当初は、茅山の次に普陀山を訪れる予定であった。ところが、海が荒れて渡航が困難とのことから断念した（4）。再訪を期したい。

### （二）旅程（単独行）：二〇〇九年十二月二十三日～二十七日

1．成田→（飛）→上海→（鉄道）→南京（南京市内泊）
2．南京→茅山→蘇州：寒山寺（蘇州市内泊）
3．蘇州→河姆渡遺跡→寧波（寧波市内泊）
4．寧波→上海（上海市内泊）
5．上海：上海博物館・文廟→（飛）→成田

### （三）アクセス

茅山は南京に近い名山として発展してきた。その点で言えば、南京からのアクセスが最も古いものである。現在は高速道路で一時間程度だが、奈良氏の報告（注5B）によれば、二三時間で山麓の茅山鎮に至るという。徒歩では、途中の句容市に一泊しての二日程度の道のりである。上海方面からは、鉄道で常州もしくは長江岸の鎮江まで行き、そこから西南に下る。

### （四）見聞報告

**一日目**は移動日。成田から上海浦東空港へ至り、鉄道の上海駅へ。鉄道での移動は初めて。駅構内へは切符がないと入れず、入構時には空港並みのチェックがある。上海から南京まではいわゆる新幹線の和諧号で（写真13）、二時間半程度。南京駅前の江蘇新世紀大酒店に泊。

**二日目**は茅山見学。早朝に市内の玄武湖畔を散策し（写真14）、午前九時に出発。途中で寧杭高速道路に上り、約一時間で山麓の茅山鎮に着く。高速を利用し短い時間の旅程ではあったが、南京からの距離感をある程度体感することはできた。

山門からは徒歩、または巡回バスを利用することになり、一般車両は山に入れない。山門は大茅山の麓にあり、仰ぎ見ると山頂の道観が見える（写真15）。今回は巡回バスを利用。

先ず大茅山の頂宮へ（写真16）。バスで十分程度で山頂へ。あいにくの曇り空で遠景は見えないが、霧雲の山中を実感することはできた（写真17）。頂宮はきちんと整備され、参拝客を迎える体制が整っている。正殿の参拝の他、いわゆる胎内くぐり（十元）もあり、それを終えると紙のお札とラミネート加工された名刺大のお札カードが授けられる（写真18）。奥にはお札に名前を書いて奉納するところもあったが、一枚百元であった。その隣には石細工のお守り様のものを販売しており、観光地化の進展が強く感じられた。宮内には、人工の洞窟が設けられていた（写真19）。

次いで一旦山を途中まで下り、向かいの峰の印宮へ。ここには高さ三三メートルの巨大な老子像が造られているが、神秘的な雰囲気からはほど遠い（写真20）。整備が進んでおり、古い施設はほとんど壊され、庭園の片隅に馬を繋いだ跡などが残っていた。

宮観はあまり感じるところがなかったが、その次に訪ねた二つの洞窟は興味深かった。

印宮から少し下ったところに洞窟の入り口の建物があり、そこから仙人洞に入る。いわゆる鍾乳洞である（写真21）。中は整備されており、しばらく下った後に少し登ると、印宮の前に出た。

仙人洞から更に少し下ると華陽洞がある。ここは南北朝梁代に陶弘景が修行をしたと伝えるところで、道教の聖地といえる。ここも鍾乳洞で、石井氏の報告（注５Ｅ）では水が出て入れないとあったが、いまは内部に金網が張り巡らされていて、洞内を巡ることができる。ここも最後に下って、下の出口から出る。入口・出口とも襞が重なったような形状をしており（写真22・23）、「老子」の「谷神は死せず、是を玄牝という。玄牝の門、是を天根という」という言葉を想起させる。大地は女性であり、母である。洞窟はその女性・母への入り口であり、いわば大地の女陰である。そこへ入ることは母体への回帰を意味し、胎内での修行を通して大地から力を得る。洞窟から出てくることは、新しい命を得て再生することを意味しよう。道教、ひいては中国文化における「洞」の意味について改めて考えさせられることになった。

なおここは、太平天国時代に財宝が隠されていたとされて破壊され、また日本軍の進駐時代にも抵抗運動の拠点となったことから破壊蹂躙されたという。

遅めの昼食。茅山名物の鶩鳥の乾物が珍しい。

新設の沿江高速道路に乗って蘇州へ。寒山寺の楓橋あたりを見て、蘇州の中華園大飯店に泊。

**三日目**は普陀山へ渡る予定だったが、既述の通り、天候不良により断念。代替として河姆渡遺跡を訪ねた。

河姆渡遺跡は浙江省寧波地級市余姚市にある新石器時代（紀元前五〇〇〇年頃～紀元前四五〇〇年頃）の遺跡。杭州湾南岸から舟山群島にかけての地域（現在の浙江省東部、寧波市から舟山市）に広がっていた河姆渡文化の遺跡である。一九七三年に、姚江という河の渡し場付近で発見され、水稲のモミが大量

に発見されたことで注目を浴びた。世界で最古の稲栽培の例である。稲の他に植物や野生動物・家畜の化石も発見され、大規模の高床式住居跡も数多く発掘された。併設の博物館に出土文物が陳列され、至近にある発掘現場が保存され参観できる（写真24）。また住居の原寸大復元模型も作られている。寧波市内へ移り、寧波大酒店に泊。

**四日目**は、寧波市内と上海市郊外を参観する予定だったが、前日の夜から具合が悪くなり、すべて断念し上海に戻る。虹口世紀大酒店に泊。

**五日目**は移動日。上海博物館と文廟の古書市をのぞく。あいにくの雨で古書市もすぐに終了。夕方の便で成田へ。

## （五）まとめ

今回は天候不良で普陀山行を断念したこと、途中で体調を崩してしまったことなど、アクシデントが重なってしまった。それでも茅山の南京からの距離を感じられたこと、華陽洞で道教における洞窟について考えることができたことは収穫であった。茅山が地肺山と呼ばれることの一端を感じることができた。また、河姆渡遺跡を見学できたことも収穫だった。

茅山について言えば、南岳と同様、拝金主義的な観光施設と真摯な信仰の場との二分化が進んでいるのを感じた。

---

注

（1）前稿の「中国の山岳と宗教見聞記（その一）」（『埼玉大学国語教育論叢』第一一号、二〇〇七年）では、二〇〇五年十二月の天台山と二〇〇六年三月の廬山への訪問記を、「同（その二）」（『同』第一二号、二〇〇九年）では、二〇〇六年八月の五台山と二〇〇七年十一月の王屋山への訪問記を記した。

（2）こうした古名は現在でも生きており、例えば自動車のナンバープレートには、その省の古名が記されている。例えば、河南省ナンバーは「豫」で、浙江省ナンバーは「浙」。

（3）冬は多湿で寒冷な湖南では、人々は体を芯から温めるために、辛い料理を好む。日本では辛い料理と言えば四川料理が有名であるが、中国では湖南料理の辛さもよく知られている。別の機会に、上海人のガイドに湖南に行ったことを告げると「さぞや料理が辛かったでしょう」と言われたことがある。今回の旅行では、ガイドが河北省出身者で、自らは辛い湖南料理を好まないとのことだったので、辛い料理を食べ続けることは避けられた。

（4）普陀山について簡単にまとめておく。浙江省舟山市普陀区にある小島で、中国仏教四大名山の一つ（他は山西省五台山、四川省峨眉山、安徽省九華山）。南北八・六キロ、東西三・五キロ、面積はおよそ十三キロ平米の小島である。隣接する洛伽山と対で、普陀洛伽（ポータラ）をなす。五代十国の時代、日本へ観音菩薩像を持ち帰ろうとしていた慧萼という日本人僧が、この普陀山の地で台風にあい出港することができなくなった。そこで観音様が日本へ渡りたくないのだと判断してこの地にその観音像を祭り、不肯去観音院を創建したのが仏教聖地としてのはじまり

と伝える。

（5）年代順に並べると次の通り。

A．常盤大定『支那仏教史蹟踏査記』（龍吟社、一九四二年）、国書刊行会復刻版（一九七二年）

一九二二年の第二回踏査で訪問。一～二月に鎮江から入っているが、道教施設しかなく、仏教関連の施設がないことや、古い石碑類がないことを歎いている。ただ、印宮から渓流を隔てた南の峰に、仙人洞・羅姑洞・華陽洞の三洞があることを伝える。

B．奈良行博「現代茅山事情」『東方宗教』（六九号、一九八七年）

一九八六年の三回の訪問内容をまとめたもの。南京からバスで通った記録だが、手書きの図版・八十年代当時の写真があり、茅山における宗教活動や道士の生活についてもレポートされている。華陽洞は、修理中であったという。

C．蜂屋邦夫『中国の道教』（汲古書院、一九九五年）

一九九二年の訪問調査記録（一九九〇年の記録も付されている）。鎮江から車で訪問。入山ゲートの設置と入山料の徴収が記されており、観光地化が始まった様子を伝える。道士のインタビューも含めた頂宮・印宮の調査が主で、詳細な図版や写真が豊富。

D．阿川正貫「茅山・乾元観を尋ねて」『大正大学綜合佛教研究所年報』（二〇号、一九九八年）

一九九七年の二回の訪問を報告。上海から鉄道で常州に至り、そこから自家用車で入山している。頂宮や印宮にも訪れているが、主としては三茅峰より東北の青龍山（鬱崗峰）にある乾元観が中心。ここは女性道士による坤道院、つまり尼寺であるが、行政区画的には、句容市東隣の金壇市に属す。

E．石井昌子「茅山への道～第一回予備調査行のノートより」『創価大学綜合文化部　一般教育部論集』（三二号、二〇〇八年）

二〇〇七年の訪問記。現在中国では宗教施設の観光地化がかなりのスピードで進んでおり、Dから十年後の訪問だがかなりの変化が見られたようである。上海から高速道路で入り、南麓のロープウェイで頂宮へ。その後印宮を経て句容市内に泊。翌日乾元観を訪ねている。

●南岳衡山・茅山関係の資料（日本での主な出版物）

・日本では、南岳衡山・茅山関連の専著はない。茅山については研究者による訪問記が何点か書かれている（5）。

●図版

図1：薄井作成

図2：薄井作成

図3：「南岳衡山遊覧示意図」『南嶽区志』（岳麓書社、二〇〇〇年）より

図4：南岳大廟「総平図」楊慎初『湖南伝統建築』（湖南教育出版社、一九九三年）より

図5：『江蘇省公路里程地図冊』（中華地図学社、二〇〇八年）より

図6：茅山周辺空中写真（グーグルアースより）

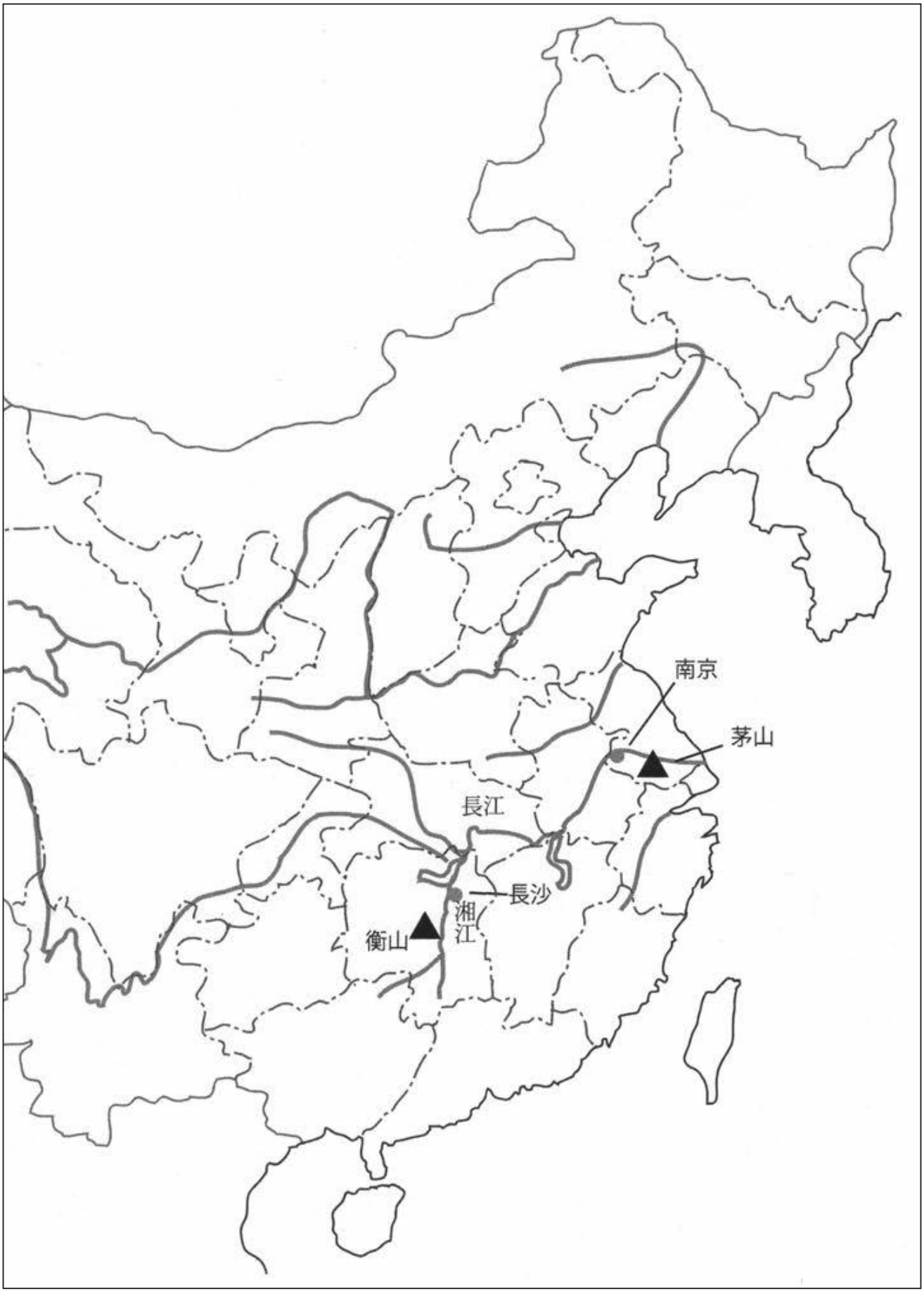



図１　衡山茅山位置図

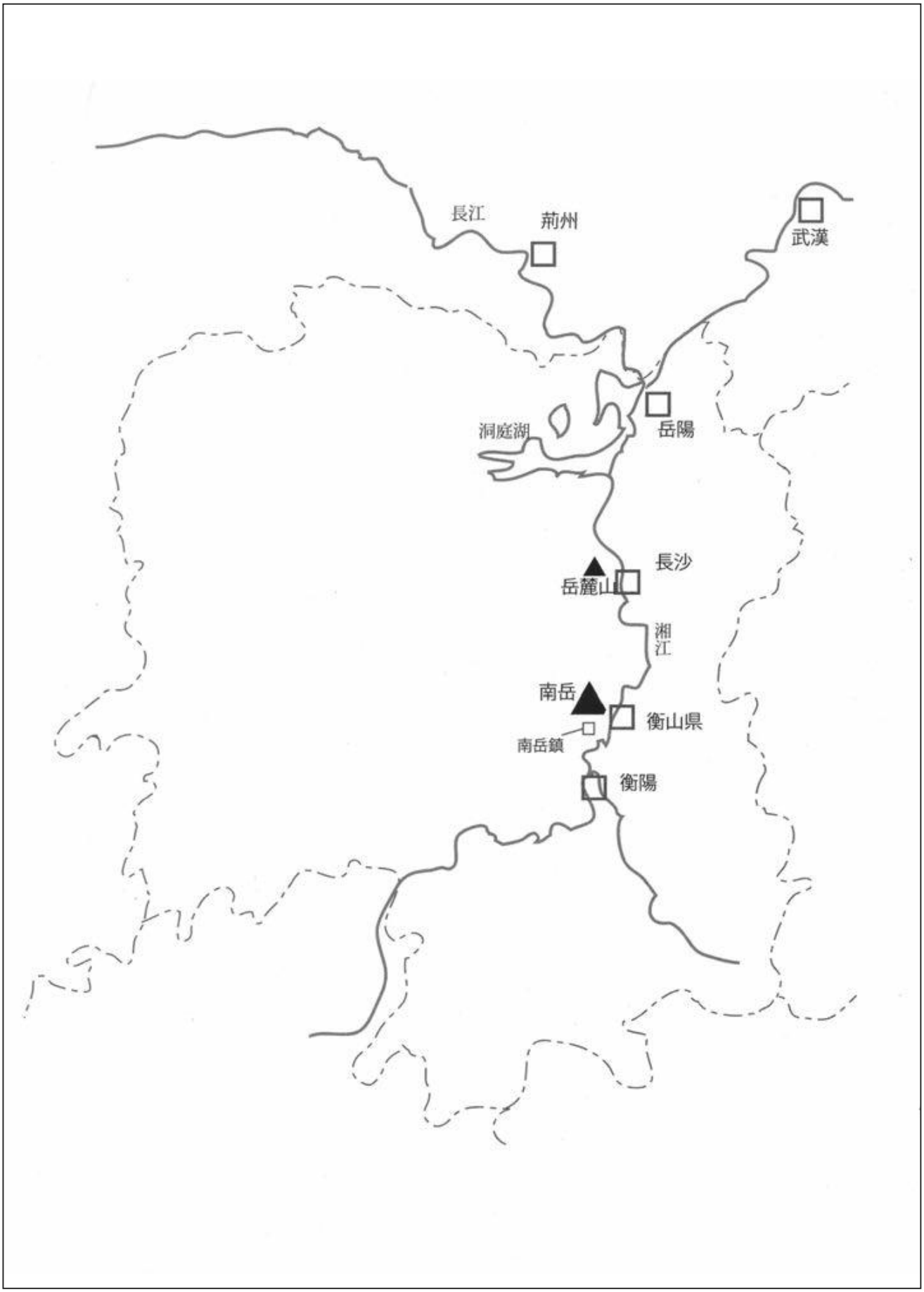
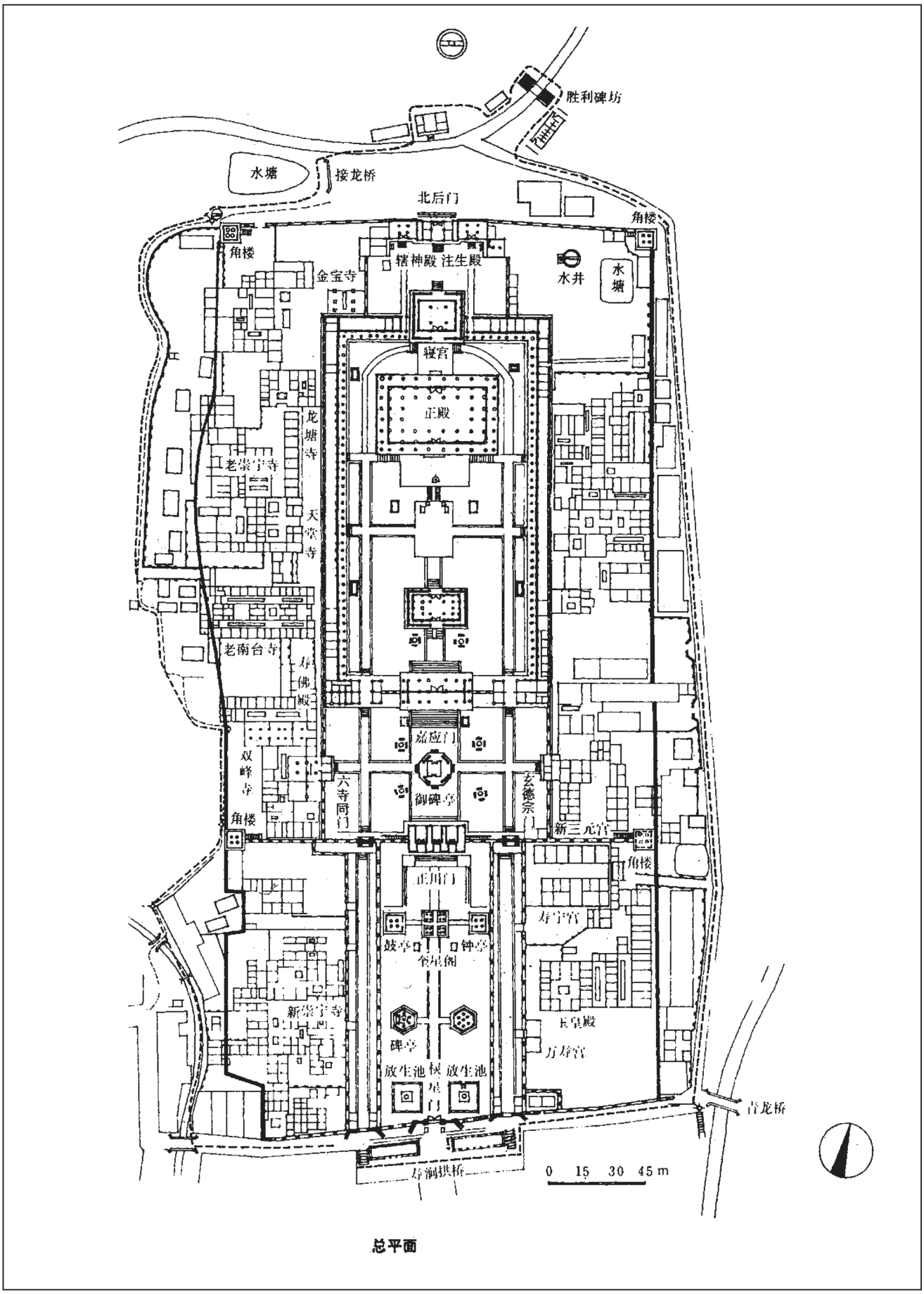



図２　南岳近郊図

南岳衡山游览示意图
祝融峰
1290▲
望日台
会仙桥
上封寺
藏经殿
民俗文化城
高台寺
广济寺
（禹王城）
狮子岩
南天门
天柱峰▲1060
湘南寺
索道站
皇帝岩
铁佛寺
至方广寺
灵芝泉
麻姑仙境
西岭门票站
邺侯书院
竹林道院
磨镜台
玄都观（半山亭）
福严寺
索道站
试剑石
“五岳独秀”
石刻
金刚舍利塔
穿岩诗林
南台寺
忠烈祠
玉版桥
神州祖源
门票站
华严湖
水帘洞
进山门票所
白龙潭
黄庭观
胜利坊
南岳大庙
祝圣寺
南岳衡山牌坊

图3　南岳遊覽図


胜利碑坊
水塘
接龙桥
北后门
角楼
角楼
辖神殿 注生殿
水井
水塘
金宝寺
寝宫
正殿
龙塘寺
老崇宁寺
天堂寺
老南台寺
存佛殿
嘉应门
双峰寺
六寺同门
御碑亭
玄德宗门
新三元宫
角楼
角楼
正阳门
寿宁宫
鼓亭
钟亭
全星阁
新崇宁寺
碑亭
长皇殿
万寿宫
放生池
棂星门
放生池
青龙桥
寿涧拱桥
0 15 30 45 m

总平面

图4　南岳大廊图

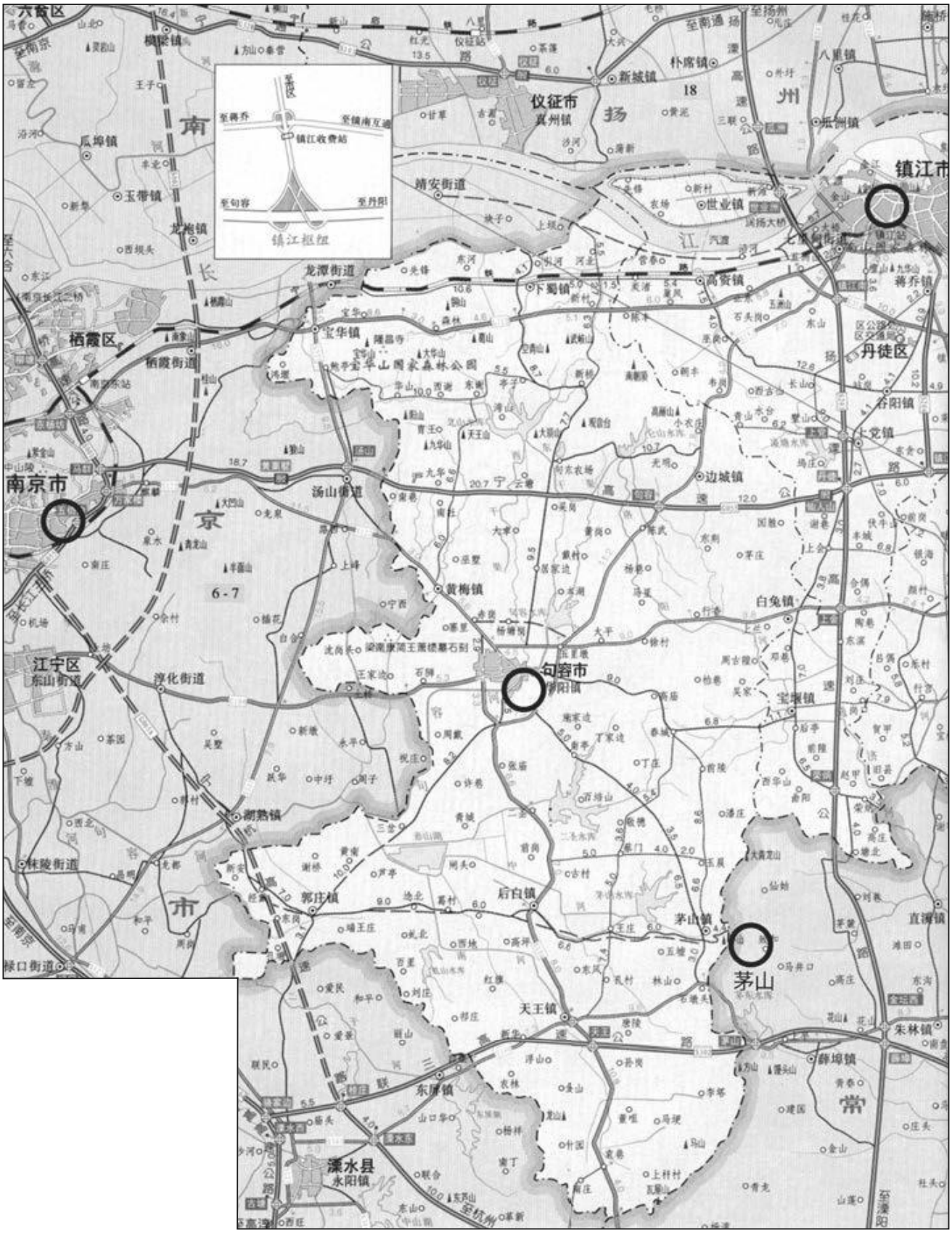

镇江市
南京市
句容市
茅山
仪征市
真州镇
新城镇
扬州
南京
常州
镇江枢纽
镇江收费站
至蒋乔
至镇南互通
至句容
至丹阳
六合区
栖霞区
丹徒区
江宁区
溧水县
永阳镇
靖安街道
龙潭街道
栖霞街道
汤山街道
淳化街道
东山街道
林陵街道
禄口街道
横梁镇
瓜埠镇
玉带镇
龙袍镇
宝华镇
下蜀镇
高资镇
世业镇
谷阳镇
上党镇
边城镇
白兔镇
宝堰镇
黄梅镇
湖熟镇
郭庄镇
后白镇
茅山镇
天王镇
东屏镇
朱林镇
薛埠镇
直溪镇
蒋乔镇
八里镇
朴席镇
瓜洲镇
6-7

图５　茅山近郊図

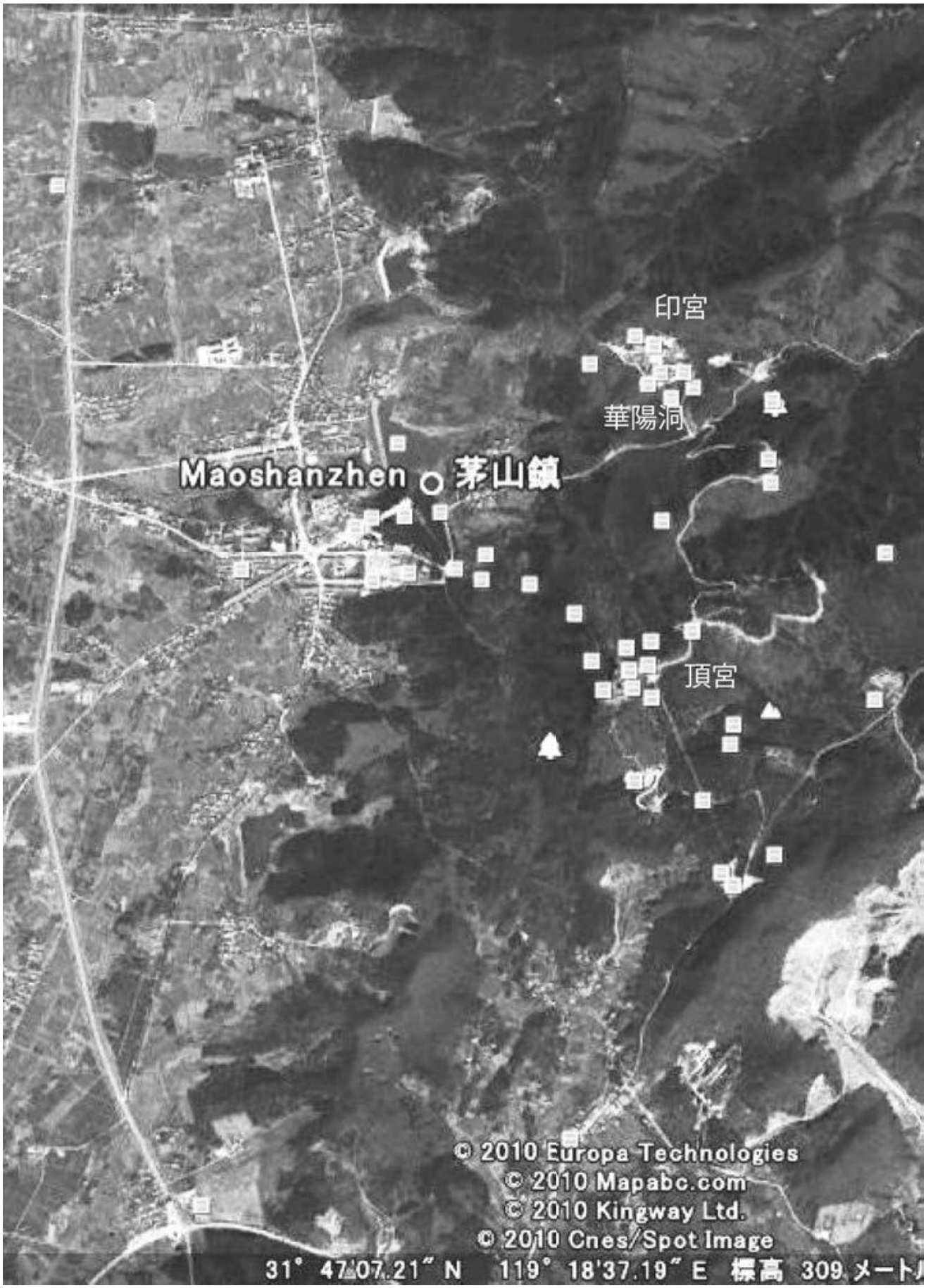

印宮
華陽洞
Maoshanzhen
茅山鎮
頂宮
© 2010 Europa Technologies
© 2010 Mapabc.com
© 2010 Kingway Ltd.
© 2010 Cnes/Spot Image
31° 47'07.21" N 119° 18'37.19" E 標高 309 メート

図６　茅山山内図

写真1　南岳南天門

写真2　南岳高台古寺跡

写真3　南岳天封寺

写真４　祝融殿

写真５　祝融殿上のテラス

写真６　南岳山頂の雲海

写真7　南岳大廟

写真8　黄庭観の麓

写真9　黄庭観の門

写真10　岳麓書院門

写真11　岳麓書院庭

写真12　馬王堆漢墓

写真13　新幹線

写真14　南京玄武湖畔

写真15　茅山山門

写真16　頂宮

写真 17　頂宮からの雲海

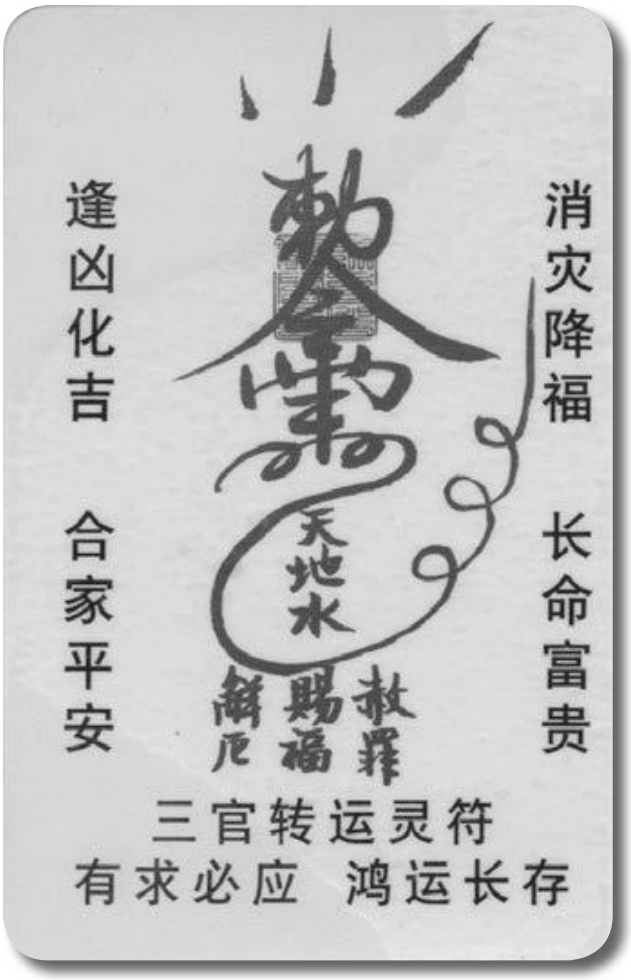



写真18　頂宮お札

写真19　頂宮の人工洞窟

写真20　印宮

写真21　仙人洞内部

写真22　華陽洞入り口

写真23　華陽洞出口

写真24　河姆渡遺跡